



文教協会50年を振り返る⑤

20周年記念式典

文教協会事務局

会報(昭和59年12月号)から、大垣市文教協会20周年記念式典の式辞等の全文を紹介します。

文教協会の進む道

さる11月12日、文化会館において文教協会設立20周年記念式典が行われました。

城郭模型完成記念除幕式が盛大に催された後、ホールにおいて挙行された式典の際、会長式辞、山田先生のお礼の言葉の中に「文教のこころ」が示されました。そこで、その要旨を紹介し、われわれの進むべき礎にしたいと思います。

土屋 斉会長の式辞



本日は、わが文教協会設立20周年記念式にあたり、大勢のみなさん方の参集をいただき、また、来賓の諸先生方、その他特別会員の皆様方のご列席をいただきまして、誠にありがとうございました。

この文教協会は、昭和39年11月7日、今日もご出席されております山田先生が、かねがね主張されておりました文教振興、教育伝統の尊重、市民が教育に対する関心をより大きくしようということから生まれたものでございます。

大垣はもともと文教都市といわれておりました。また明治維新には、梁川星巖先生中心に維新回轉の大事業、その中心思想を形成しました梁川先生をはじめ、有数な先覚を生み出しております。学者、軍人、志士と、10万石の地方の大垣としては、当時めづらしい人物を輩出しております。これは一体、何故だろうか。

一つには、徳川300年という長い間、戸田公という一人の藩主によって治められていたこと。

もう一つは、隣りに尾張藩という強大な藩をもち、武力をもって対抗することはもちろんできず、藩政の政治の中で、巧みに藩を存続させるという藩政にあったのではないかと思います。

その一貫が、産業であり、教育その他もろもろの治水事業であったと考えます。この教育の伝統が生まれたということが、今日の大垣の文教都市という名前を誇らしく語れる大きな要素であったと考えます。

明治維新の新しい時代に入りますと、新しい教育が生まれて、120年ほどになるのですが、この間に大垣は、明治維新時代の誇った、本当の意味での文教都市であったか、この流れを汲むものであることに違いはないと思いますが、しかし、当時の政府の教育方針というものが、一流国としてのし上がるためには、どうしても科学思想、経済思想を興隆させなければならないということで、日本全体の教育思想の中に埋没されてしまった、ということです。

先ほど、市川先生をはじめ先生方のご労作、大垣城の模型をご披露申し上げ、市にご寄贈申し上げました。あれを見ますと、誠に壮大な大垣城、大垣城郭、それを取り巻く大垣市民の繁栄というものが、力強く生きていたに違いないと思います。それが現在では、普通の近代都市にすぎない。

これは、大垣も近代文明の中に埋没していったといえるのであります。

今日、日本の政府は、教育臨調ということ唱えておりますが、その目指すところは、もっぱら形に多くの勢力を費やすようでございます。しかし、本来から言えば、教育の精神的な部面が、本当の意味で復活しなければならないと思います。

文教協会が、そういう意味において今から20年前本当の教育を目指そうということで、皆さん方の非常なご賛成をいただいて、その活動は地味でありすぎたかもしれませんが、今日への歩みを続けてきたのは非常に意味あることであると思います。今後21世紀に向けて、こういう地域的、部分的な特性というものを持つことは、非常に困難でございますが、行政面では、いろいろな施設機関ができれば、精神面においては、都市市民あげての教育というものを目指すことができるのではないかと思います。

本日は、意義ある20周年にあたり、皆さんと共に大垣の将来、大垣の教育の将来に祝福したいと思います。来年は、戸田公入城350年ということで、市の方でもいろいろ企画されておりますし、わたし共、市民の一人としましても喜びを表したいと思います。盛大な式典になると思います。新しい大垣の教育というものが、立派に育っていく時代を迎えたように思います。皆さんとともに、今後一層の発展をしたいと思います。式典の最初にあたりまして、一言、皆さんへのお礼とさらに皆さんの一層のご活躍を祈りまして、ご挨拶といたします。

山田光之助先生の言葉

山田でございます。お礼のご挨拶を致したいと思えます。わたしは大垣に住を受けましたのは、昭和24年でございます。それから、いろんな会合に席を汚し、よく聞いた言葉は「文教都市大垣」という言葉でした。のち、教育長と命ぜられ、いろんな会合で大垣の教育を話す機会がございましたので、興文100年誌、興文120年記念誌とかをひもといて、大垣史を勉強しました。そして実際に驚きました。当時の大垣町を考えますと、人口1万人内外の町ではなかったかと思うのでありますが、その時にこの大垣で全国の博士号の約1割を占めるといふことは、正に全国的な驚異であったと思えます。

さらに私が驚いたことは国の有力な各位が、今のPTAと違って、自分の子弟が必ずしも自分の学校の生徒ではないのに、お互いに金を出し合って、その学校の教育を援助した事実であります。私は博士がたくさん出たことも勿論、全国的に誇るべきだと思いますが、さらに民衆が、民衆の先覚者が、如何に教育を愛したか、ということに本当にびっくりしました。そして、その歴史的事実に基づいて、私が教育長時代に、それにふさわしい事実があるだろうか、と考えざるを得ませんでした。考えますといろいろございました。

この文教協会が生まれる時、私は第一に、金が問題である。これは先生方に出してもらわねば、と考えました。しかし先生方に出していただく金というものは、そんなに多くありません。それで、有力な財界の人にお願ひし、毎年10万円ずつ出していただきました。貨幣価値を考えますと、恐らく今の金の1千万円くらいの金になるかもしれません。

そういう金と、先生方の貯金によって、文教協会が成り立ちました。恐らく全国にあまり類例がないと思えます。私はこの先輩の教育的配慮というものを現在の生かすには、どうしたらよいか、と考えました。それは、一面において教育力のある先生群がなければならぬ。また市民全体が、教育に真に理解をもち、教育を尊重するようにならなければならない、と考えました。

ただ今、会長さんのご挨拶にありましたように教育審議会の根本の問題は、本当に教育力のある教師を如何にして養成するか、そして父兄が、本当に教育というものを理解しながら、教育をどんなに尊重していくか、その父兄と教師群との連絡をどうするのか、という問題が、基本的な問題として論議されるのではないかと、思えます。

39年に生まれた文教協会は、その後の市長さん、教育委員、教育長さんによって育てられ、当時の校長諸君によって育てられました。だから、私は本日、この表彰を受けましたが、私の力ではないのです。大垣市の教育界の、大垣市の市民の先覚、大垣市の行政当面の理解しからむところでもあります。

教育は、先生だけでできるものでないということを、ひしひしと感じます。社会全体が、市民全体が、本当の理解者になり、子どもに、我一人、古今東西を通じて、我一人が現実の存在であることを認識させることが緊急の課題であろうと思えます。

おかげさまで20年すぎました。これから先、皆様のご努力によって、いよいよ益々、その内容を充実し、今申しあげました点に力強い発展を招来されることと思えます。

今度作られたご本の中には、先覚者のいろいろなことが書かれています。恐らく地下に魂があるならばそのご努力に対して感銘しているものと思えます。お城の模型ができました。私はこれを見て、こんなに大きかったのか、とびっくりして見ていました。町を上げて、真の文教都市、日本一の文教都市になることを願ひしてやみません。つつしんでお礼申し上げます。

